

慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resources

Title	牧野信一「夜見の巻」論：採集・名前・幻想
Sub Title	
Author	副田, 賢二(Soeda, Kenji)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	2001
Jtitle	三田國文 No.33 (2001. 3) ,p.25- 37
JaLC DOI	10.14991/002.20010300-0025
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-20010300-0025

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

牧野信一「夜見の巻」論

採集・名前・幻想

副田 賢二

1 へ私「ゼーロン」をめぐる関係性の構造

昭和八年十二月、『文藝春秋』に発表された牧野信一の「夜見の巻」には、「吾が昆虫採集記」の一節」という副題が付けられている。題名をめぐるこのような二重化は、「夜見の巻」というテキスト自体を、「吾が昆虫採集記」に包含されるべき一部分であるかのように見せる効果をもたらすことになるだろう。そして、このような二重構造が、このテキストの構造及びそのフィクション性の質自体にも関わるものであろうことは容易に推測される。

だが、実際のテキストには、そのような仕掛けとしての二重構造を窺わせる記述は少ない。それが明確に示されるのは「私」が「ゼーロン」を偶然ではあるがうまく乗りこなして称賛された後、我慢していた放尿を果たすことが書かれる三章末に続く、四章冒頭部のみである。

「吾が昆虫採集記」の件りとしては、その間の出来事は脇道に外れる故に省略して、夜見の酒倉の二階にペン先を戻さうならば、あたりは既に秋の香りが立ち込めて、私は低

いらムプの下で蜂の巣の破片を整理してゐた。

(以下傍線は全て論者に拠る)

ここで、このテキストには「吾が昆虫採集記」としてのテキストの流れと、その流れからすれば「脇道」であるようなテキストの流れ（おそらくそれを含めた総体を「夜見の巻」と呼ぶだろう）がある、ということが示される。さらにここでは、「吾が昆虫採集記」としては「脇道に外れる」記述は「省略」されているのであり、このテキストは実は「吾が昆虫採集記」であり続けたがっているのだ、といった仄めかしさえそこには見て取れる。

ただ、このテキストのどこが「吾が昆虫採集記」性が色濃い部分で、どこが薄い部分なのか、ということとはよくわからぬ。そもそも、その題名に示された二つのテキストの在り方は、それぞれ分離された上で画定され得るような類のものではないのである。つまり、私という人物が「昆虫採集」に興味がある、という人物設定上のこの前提は、テキストの変転するダイナミズムのかたちを対比的に析出し、差異化するための「基準点」であるに過ぎないのだ。実際に四章末でも「肩に掛けた弓張り

提燈にえんまこほろぎが止まつて頻りと翅をこすつてゐた」のを見て、「私の採集は膜翅から直翅に移つてゐたので少なからず食指が動いたが、折角の姿勢と未曾有の恍惚状態を崩すのが惜しまれて尚も微動さへ浮べなかつた」と書かれていたのであり、テクストの進行につれて様々に変転する「私ーゼーロン」をめぐる物語と並行して、私のこの「採集者」としての在り方が、不変の定点として存在していることがわかる。

よつて、このテクストは、そのフィクション構造において分離、分析できるような方法的性質を持ったものであるとは考えにくいのであり、やはりそこでは、このテクストのダイナミズムの質自体に注目してゆくことが重要になるだろう。

そこで、「夜見の巻」における「ゼーロン」とは何か、という問いからやはり出発しなければならぬ。このテクストの中心部にゼーロンという存在がいることは言うまでもないだろう。野口武彦氏が言うところの、私の「ゼーロンへの入れこみかた」のかたちを、テクストから抽出する必要がある。まず、一章のこのような記述が問題になるだろう。

ゼーロンとは私が五六年も前に抽象的に名づけた酒倉の老荷馬であるが、そして私の空想ではドンキホーテのロシナンテにも匹敵すべき私の愛馬であつたが、実際では少しも私に慣れてゐなかつた。私はそれに勝手にそんな名前をつけ、永年の間夢に慈しみを寄せつづけてゐたせゐか、目のあたりでは一向私に親しみもせず、おまけに臆病馬で、蛇が一尾腹にとまつても激しく全身を震はせて飛びあがつたり、牝馬に出遇ふと己れの産駒たるも打ち忘れて機関車の

やうに猛り立つたりする態に接すると、悲しみともつかぬ憎念に炎ゆるのであつた。だが永い間の私の「ゼーロン」に寄せる感傷性は、やがて人々の間でさへ認められて稍々ともすると彼等は、その鞍を私にすすめるのが習慣だつた。

ここでの「私ーゼーロン」の関係性の構造は、このような三つの層に分かれていますと考えられる。

A 私の側がゼーロンを幻想化して、ロシナンテになぞらえていたという心理的關係性 (〓部分)

B 私の幻想化にも関わらず、ゼーロンは私に全く慣れてくれないという現実的關係性 (〓部分)

C 私の幻想に基づくゼーロンへの「感傷性」ゆえに、私とゼーロンが結びついていると周囲の人々から信じ込まれているという社会的關係性 (……部分)

「夜見の巻」というテクストは、「私ーゼーロン」をめぐるこのような異なるレベルの關係性が、相互に交錯する場として捉えることができる。勿論それは、私という存在をパロディ化するための仕掛けでもあろうし、そこに、一九三〇年代に様々に試みられた、小説表現をめぐる方法的模索(あるいは「私小説」の一元性からの逃走)の跡を見出すことも可能だろう。しかし、私の自意識をめぐる物語として単純化するには余りにも雑多な要素がこのテクストには氾濫しているのであり、そこでこのゼーロンという存在の感觸からも、やはり目をそらすことはできない。特に、このBの關係性においては、ゼーロンの身体や生理が私の側を圧倒し制御してしまうようなかたちが噴出してくるのであり、そこにはいわば相互的な制御關係(「御する」「御さ

れる」の関係)が存在していると言えるだろう。また、このCの関係性が、「夜見の巻」における私の演技性を生む重要なファクターになっていることも確かである。そしてその演技性は、二章での一見自意識的な堂々巡りの「狂奔」の内部にもなお孕まれている、テクストの根源的な動力でもあるのだ。

つまり、このテクストにおけるゼーロンは、私の幻想的内面の内に単一なイメージとして見出された存在なのではなく、そのような関係性の絶え間ない交錯と軋みの現場の内に「棲息」する存在なのである。例えば、このような記述が目目される。

ゼーロンは、突然齒をむき出すと、鼻つまりのやうな鈍重な声で醜い嘶きを発した。その特異な嘶きを耳にするといつも私は、力一杯に「びんた」の衝動に駆られるのが常だつたが、変なハズミから他人前では特に私はゼーロンを信じてゐるといふ風になつてしまつてゐるので、別段に憎い眼つきもしなかつたし、また蔭ではゼーロンよりも寧ろ私の方が臆病で、どちらかと云へば私の方が遠まはしに老馬の機嫌を窺ふくらゐであつた。どういふものか、いや、それは私の心底に眞の愛情が湧かぬためだらうが、どれほど私が奴の空機嫌をとつても一向に慣れるけしきもなく、その憎体な嘶きで飼手を飛びあがらせたり、尻尾の房で面体を振り払つたりするばかりであつた。(一)

ここでのゼーロンの「特異な嘶き」は、私の側に多元的な反応を喚起する。「びんた」の衝動」という暴力的な反応、そして他人に「私はゼーロンを信じてゐる」と思われていることから由来する臆病さ、そして「空機嫌」取り、である。二章までの

このテクストは、〈私！ゼーロン〉をめぐる様々な関係性が複合的に交錯し、決して整合化されないままに展開されるのであり、ゼーロンはその場の中で非確定的な動きを示す。野口氏は「自己自身のメタファーの美酒」から牧野がそこで「醒めはじめている」ことを指摘し、「ゼーロンが記号表現系を介して語られないその分だけ、当人の記号内容性が露出されてくる」としている。だが、そのような記号性の質の問題のみに、ゼーロンをめぐる問題を還元することもできない。ここでのゼーロンは、「ゼーロン」(改造「昭和六十」の場合のように、「ホース……：ホース……：ゼーロン……」(消防隊の「手おしポンプ」のホース「Hose」から馬「Horse」、そしてゼーロンへ 論者註)という、イメージの偶発的スライドを可能にさせるような「軽快」な存在なのではなく、その身体に様々な故障を抱え、「あの若者の団扇のやうな平手が、どす黒いゼーロンの頬骨に景気よく響いたら、——どんなに目醒しいことだらう」と、私にその停滞の暴力的解消を夢想させるくらいに、焦燥感や不安全感を常に私に突き付ける、「廃齡」の身体を抱えた駄馬なのである。

確かに、この「夜見の巻」で牧野信一という表現者が「醒めはじめている」という感触は感じられるが、と言つて「ゼーロン」という名前において、牧野テクストにおけるゼーロンという馬が一貫した普遍的特性を示している訳ではない。逆に、「ゼーロン」という牧野テクスト固有の記号は、決して一つの固定した形態に纏まり得ない、ある攪拌的なダイナミズムの「起源」なのである。佐藤泰正氏は「自己のとつた文体と方法を、

その内側から精一杯に蹴散らし、相対化し、その「詩論」に不思議な躍動と熱気を与えるのもまた、このゼーロンである」と述べているが、このゼーロンが、決して確定された私の幻想の内部領域に存在するものではないことを、まず確認しておかねばならない。

とは言え、「夜見の巻」におけるゼーロンは、佐藤氏の言うようなエネルギーの喚起作用を常にもたらしている訳でもない。ここでのゼーロンは、テクストを活性化させると言うよりも、私が抱える内的なストラグルがそこに衝突し、滞留してゆく、ある異和的な「対象」であると言った方が適当であるだろう。一章では、そのような「私ーゼーロン」をめぐる錯綜した関係性の構造が、私によつて対象化され、呈示されるのである。

2 狂奔と転換——私の演技性

そのようなゼーロンが再び動き始めるところから、二章は始まる。「びんた」の「想ひを晴らし損つた向つ腹」を「胸一杯にくすぶ」らせつつ、私と「廃齡たる」ゼーロンは動き出す。一章では、「私ーゼーロン」をめぐる関係性のかたははいわば強固な「前提」として（「私ーゼーロン」の「感傷」的な関係性は、テクストが始まる以前から既成のものとして社会的に認知されている、となつていのであるから）確定されていた。だが、二章は、そのような場の中心にいるゼーロンが「動き出す」瞬間、すなわち、そのような関係性の構造が流動化してゆく瞬間から始まるのである。そこで村の「若者」は「私がゼーロンを愛するのあまりそのやうに気ままに放擲してゐるのだらうと思

ひ違へて」おり、私はそれを意識しつつ「多くの傑れた騎手のやうに姿だけはそのうのと胸を張つて」「発足の合図をかける」のだが、ゼーロンは「飽食した時」にのみ気ままに歩き出す。二章はそれ以降、ゼーロンの不規則な動きと私の意識の明滅において、パノラマ的に展開されていると言えるだろう。そしてそのような部分こそが、「牧野信一」像の内で最も流通している、いわゆる「ギリシア牧野」的表現であるとも言える。例えば、このような部分である。

ゼーロンと私と、悪童の牝馬との世にも奇怪な格闘は、世紀末流の泰平民の残虐性に投じて歓呼の声を浴びながら、ここを先途と戦はれていつに果てるかの始末もなかつた。——二頭の馬は前脚を挙げて棒立ちになると見れば、私はゼーロンの喉笛に武者振りついて、息の音を止めようとする、敵方が後脚をあげてゼーロンの頤を蹴らうとすれば、私は矢筈に槍を伸して打ち払ひ、ゼーロンの耳をつかんで鼻面の向きを変へて、滅多打ちに尻を打ち、鷲の翼のやうに殆んど一直線に拡げた両脚を飛びあがりざまに、ハッタ！ と打ちしほめて左右から馬の胸を蹴つた。私の両脚の猛獸捕獲器の如きバネ仕掛けと、右腕の鞭の力とは水車小屋の構造のやうに活躍を続けてゐたが、次第に動力の鈍りが現れ、あはや私の腕や脚はバツタのそののやうに折れて、精根も尽き、今にも昏倒しかかつた。面紗をへだててゐるので観衆には私の表情がそのままには映らなかつたのか、

「ゼーロンの乗り手の顔は、男らしいぞ！」とか「眼つき

が強さうだぞ！」などといふ賞賛を浴びせるのだが、私はもう眼蓋さへも動かすことが出来ぬやうなフラフラ状態で、妙にあたりがしいんとして来ると、有り難い眠りのやうなものにふはふはと体を宙に浮せられるかのやうだつた。

このような描写は、一見すると狂奔するエネルギーの描写のようにも見える。だが、あくまでこれは、傍線部からも窺えるように、〈私―ゼーロン〉の在り方を外部から対象化する「観衆」の視線が常に意識された上での、演技的「狂奔」なのである。実際、この二章でのゼーロンの「狂奔」が、一章で私が定義していたところの「臆病馬」としての属性のかたちを忠実になぞつたものであることは、やはり意識されねばならない。「面纱」^{ヴェール}を被つた私は、外部の視線の速度に同調することさえできず、自らの身体的主題である「用を足す」ことの内に小さく縮こまりながら、〈私―ゼーロン〉をめぐる運動の「有り難い眠り」の内に浮遊し続けてゆく。ここには、意識の運動自体が自己目的化され、それが外部からの視線の内に演技的に反復されるような事態が起きているのである。

ただ、このテキストのダイナミズムは、そのような反復の内に全て回収されるものではない。説明的な傾向の強い一章の記述から映像的な叙述へと転換した二章は、その直後このように続いてゆく。

「落つてやがら、あいつ奴、わらつてゐるやうだぞ！」

「自分こそ面白がつてゐるんだらう！」

そんな声が、遠くから聞えたが、何といふこともなしに

私は、

「ああ、もう駄目だ！」

と呟いた。そして私は、たしかにそれまで握つてゐた捕虫網の棒を、意味もなく空へ向けて投げ棄てたまま、激浪に弄ばれる小舟に似た馬の首根に観念の眼を閉ぢて、安らかに眠つた。

ここで、そのような私の姿を解釈する声が「遠く」から聞こえ、狂奔するゼーロンを冷静に乗りこなす私、という意味的な像がそこに浮上する。勿論そのような像化こそが私をパロディ化する機能を果たしているのだが、同時にここで私が「何といふこともなし」に「ああ、もう駄目だ！」と呟き、「たしかにそれまで握つてゐた捕虫網の棒を、意味もなく空へ向けて投げ棄てた」ことが、後のスズメ蜂事件に繋がつてゆくのであり、それはこの二章における決定的転換点であると言えるだろう。

私が一章において自ら喋り、前提としていた〈私―ゼーロン〉をめぐる関係性の物語は、二章の内部で、主に私の意識の枠組みの変質において融解してゆく。私が「ゼーロンを乗りこなせない」という私の意識レベルの前提が、二章の進行とともにいつの間にか「解除」され、結果的に私が「秘術」(二三)と呼ばれても仕方がないような高度な制御ぶりを見せていることは、このテキストの転換と統合の機構を窺わせる重要な要素であろう。Cの関係性において成立している「私とゼーロンが結びついている」という前提は、私がゼーロンを偶然乗りこなすというこの二章の事態までを説明するものではない。ここでテキストは、自らが冒頭で措定した形態の枠組みを超え、新たな地点

へと展開してゆくようなダイナミズムを帯び始めるのだ。それは、ゼーロンに騎乗する私をめぐることのような記述からも窺うことができるだろう。

ゼーロンは真黒な凶太い鼻腔を栓を抜いたやうに開放して息切れの吐息を濺々と吐き、長い舌を横口からだらりと垂らしたまま、奥の院への坂徑をまつしぐらに駈け登つて行く牝馬の後姿を土塊に似た眼玉でどんよりと見あげてみた。とても追ひつけぬものとあきらめたものか、奴は荒々しい溜息ばかりついて口腔をも開け放してゐたが、やがて、吸ふ息が皆無で、吐き出すだけの溜息の源も尽きて風船玉が濁んで行くやうに吐息の音が次第にかすれて来たかともおもふと、膝頭がふらふらとして腑抜けとなり今にも地面に腹をつけて了ひさうな症状を呈した。

私は、思はず前後のことも忘れて、

「これは、うまいぞー」

と呟いた。此奴が、このままくたばつてしまへば、今こそこのうのと鞍から降りて、何ものよりも切なくここまで持ち泳へてゐた用が足せるぞ！と思つた。その瞬間、真に私は蘇生の感を沁々と味はつた。

このような事態は、恐らく一章の時点で予想さえされていないかつたであろう。このゼーロンのへたばりは私にとつては僥倖であり、そこではゆつくりと「用を足す」ことさえできるのだ。

「蘇生」という言葉が使われていることから窺えるように、ここにはパロディ化された「死と再生」のモチーフがあると考へられるだろう。この、ゼーロンが死んで私が再生する、

というかたちにおいて、へ私ーゼーロンの關係性のダイナミズムをめぐる転換が表象されているのである。

そして、このような二章での「活劇性」の浮上は、スズメ蜂事件をさらにテクストに呼び込むことになる。「さつき夢中で投げ棄てた網の先が偶然にも、蜂の巣に衝突した」ことにより、私の意識の内部で自転していた二章の物語は、結果的にデウス・エクスマキナの解決を迎える。そこで「へ私ーゼーロン」をめぐる「既存」の關係性の構造は散失してしまうのだ。このスズメ蜂事件をめぐる記述においては、Aの關係性はとうにテクストのエクリチュールの領域から飛び去つており、Bの關係性における「慣れてくれない」という現実性自体も、このゼーロンの「狂奔」の最中においては、もはや「關係性」という形態としてはあり得ない（ここでゼーロンは、対「私」をめぐる關係性の内で「狂奔」しているのではなく、ただスズメ蜂に刺されたというその否応のない激痛故に暴れているだけなのだから）ものであろう。

そして、このスズメ蜂事件で散失してしまつた「へ私ーゼーロン」の關係性の構造は、以後決して修復されることはない。テクストの前提であつた様々な關係性のフォーメーションはここで一旦無化され、私の能力をめぐる村民の「誤解」という意味的な帰結の内に、テクストは沈黙化してゆく。この三章においては、私の意識と他者の認識は、それぞれ決定的に乖離したままでまとまつてゆくのであり、その最終部では、一同に「謹聴」されるべき「訓話」が、耐えに耐えていた「用を足す」こととしてなされるという「落ち」において、「へ私ーゼーロン」をめぐ

る物語は一旦完結するのだ。そこで「私・ゼーロン」のCの關係性は、文句なく賞讃されるべきものとして公共的意味(類い希な馬の乗り手であるということ)の側に暴力的に転化され、衆人の目の前で胴上げとして儀式化された上で、「訓話」という形で改めて言語化されるべきものとして、私に強要されてゆく。この段階では、Cの關係性の構造に基づいた私の演技性自体が、もはや私の「所有物」ではなくなってしまうのである。そこで私は、ゼーロンから引き剥がされてしまう。

このような自己の演技性の無意味化と、「私・ゼーロン」の關係性の散失を経て、四章の私は改めてゼーロンに対峙してゆく。つまり、三章と四章の間には、テキストの構造レベルにおいてもその内容レベルにおいても明らかな断層があると言えるだろう。よって、その断層の間に横たわる問題を、次に検討せねばならない。

3 孤立するゼーロン・孤立する私

四章でテキストの「ペン先が戻」される場は、夜見から竜巻村までの野外の空間から、「夜見の酒倉の二階」という室内の空間へと変わる。そこは「蠍座の一端から仄かに流れ出てゐる銀河が北方の空高く龍巻山の上に翼を拡げる白鳥座を貫いて、夜更けのアンドロメダを呼んでゐる」る、壮大な宇宙を見上げることのできる場でもあった。つまり、この「夜見の酒倉の二階」という場は、私のまなざしがゼーロンの非確定的な動きやその重苦しい身体の磁場から解放され、自在なパスベクトタイプを

帯びることのできる、いわば「幻想の温床」であったのかも知れない。

しかし、そこで私の想像力は決して「ゼーロン」という場所から離脱することがないのであり、再び私はゼーロンをへべガス・スピーッコ馬・土龍馬・ペガサス」と連なつてゆくその記号性の領域に引き戻されてゆくのだ。この四章の冒頭にある、「私は低いラムプの下で蜂の巣の破片を整理してゐた」という記述も、既に断片化した「ゼーロン」という記号を再構築しようとしている私の在り方を示すものである。さらに、このような記述が続く。

——私は星を眺めてみると、あんなに憎らしいゼーロンではあるが、その理由はともあれ、あの素晴らしい狂奔振りはこの世のものとも思へぬ程の、観れば観るほど異彩を放つて、いつかは天空のペガサスを連想せずには居られない花やかな畏怖に駆られて来るのであつた。あんなビッコ馬に、そんなきらびやかな連想を通はせるだに業腹なので、大いそぎで星空から眼を落とすと、日頃から口を極めてゼーロンを軽蔑して、土龍と嘲つてゐる影法師連へ想ひを通はさうと努めたのである。

「もぐらだ！ まさしく彼奴は土龍の性だ。」

と私は呟くのであるが、逆らへば逆らふほど翼ある馬の奇怪な幻は見るも鮮やかに虚空を蹴り、きらびやかな星空を駆け回り、やがては恵みに富んだペガサスの頭上には、さんらんなる金色の後光が輝き始めるのであつた。

この「ペガサス」幻想の強度は、「ただの幻想」という惰性的な

ロジックの内にたちまち消えてしまうほど、薄弱なものである(逆に、そのような薄弱さこそが、牧野テクストへの密やかな愛玩を今日まで生んできたわけであるが)。ここで頻出する「何々すれば何々するほど」という表現は、この「ペガサス」幻想に随意性が伴ってはならず、逆にそれが強迫的なものとして浮上していることを示していると思われる。ここにおけるゼーロンは、私の薄弱な幻想の領域にいわば揺曳している存在なのである。

一方、三章での賞讃を経た私が、その後周囲からどのような「評価」を受けているのか、その辺の事情はテクストからはよくわからない。ただ、この私がゼーロンとともにまなざされる存在ではなくなっていることだけは確かであろう。四章においてはCの関係性は既に散失しており、そこではただ、ゼーロンの「廃齡」の身体のみが、周囲から冷たく蔑視される対象として取り残されているのである。そして、その私の側も、へ私ーゼーロンという個人的な共同性の場から既に放逐されているのだ。

当のゼーロンは数日前から既に籠居して、株だけは常にも増して貪る癖に、なぜか人間の姿を極端に嫌つて、人の近寄るけはひがすると放屁をもつて退け、終日終夜入口の方に背を向けたまま「ふて寝」の惰眠に耽つてゐるといふ専らの噂であつた。酒倉の土龍馬と云へば誰しも、鼻をつまんで顔を顰めぬ者とはなかつた。

孤立し「土龍馬」と呼ばれるこのゼーロンの「籠り」が、ゼーロン自身のどのような感情に起因しているのかは明確ではない。勿論それは「本来」のゼーロンに戻つたということかも知

れないが、「なぜか人間の姿を極端に嫌う」と書かれているように、そこには何らかの変質があると考えられる。ここでゼーロンが「なぜか人間の姿を極端に嫌う」ことは、へ私ーゼーロンの関係性の枠組みが崩壊して、両者がともに既在の関係的な共同性の場から排除されたことに拠るのかも知れない。その意味で、ここでのゼーロンの在り方は、テクスト冒頭で示された私の「採集者」的相貌とことなく似通っているようにも思える。

そして、私は再びゼーロンと関わつてゆこうとするのだが、その意識の内には、三章までは存在していたへ私ーゼーロンの関係性を構成していた「論理」が露出してゆく。

たとへこの現世の上では、不貞くされの土龍馬であるとはいへ、ひとたびゼーロンとしての因果なゆかりを持つた上は、自分までが土龍馬と蔑んで見回もしないといふのはうしろ目たき思ひであらう——私は、終ひにさう気づいて、提燈に火を入れた。

ここにはある決定的な「転倒」がある。そしてこの「転倒」は、牧野信一という表現者が自らの幻想に「醒めはじめている」ことを示すものというよりも、むしろその「転倒」性こそが、へ私ーゼーロンの接続面のかたちそのものであると言ふべきであろう。この「ゼーロンとしての因果なゆかり」というものが一体どこに由来するのかは、このテクストからは具体的にはわからない。確かにゼーロンが私の幻想の対象である、ということを示唆されているが、それが「ゼーロンとしての因果なゆかり」という、いわば既に確定した因果性、事実性として捉えられるということ自体は、決してテクストに内在する要素によつて説

明、保証されるものではない。「因果」をめぐる順序性が無化された上で、ゼーロンは「あらかじめ『ゼーロン』であること」においてここで対象化されるのだ。その意味で、この第四章に浮上しているのは、もはや関係性の問題とは言えないものである。私とゼーロンはそれぞれ自らの孤立性を抱えて「夜見」という場の周辺に放置され、そこで再び出逢うことになる。そして、私の転倒性自体が孕む問題は、私がゼーロンに実際に呼び掛けるその出逢いの現場において顕在化することになるのだ。

酒倉の軒下を抜けて納屋裏へまはると、星月夜に映えた豆畑が青白く光つて、淵のやうに静かだつた。(中略)横木の間から覗いてみると、なるほど奴は頭部を奥にして太々と寝そべつてゐた。人間を毛嫌いしてゐるといふからには就中、私であるといふことを悟られたら激しく冠りを曲げて脚蹴にでもされるだらう——私は誰よりも奴に対して脛に傷持つ身と覚えてゐるので怖る怖る近づくと、まるで猛獣に餌でも与へるかのような臆病な物腰で、さつと奴の口のあたりにパンの棒を投げ出すと同時に外へ飛び退いた。そして息を殺して様子を窺つた。土龍馬は寝そべつたまま餌食を頬張つてゐたが、別段私に危害を加へさうもないので、私はいかにも物優しく慈愛のこもつてゐるかのやうなつくり声で、

「ゼーロン！」

と呼んだ。奴と面と向つて、この名前を口にしたのは、おそらく最初の決心だつた。私は吾ながら自分のわざとらしい音声に冷汗を覚えすには居られなかつた。

勿論ここでは、私とゼーロンの姿を誰も見てはいない(超越的な語り手を除いて)。ただ、この私秘的で密やかな両者の関わりの方は、決して愛情や慈しみに溢れた暖かい場ではない。「夜見」といういかにも多義的な深読みを許す地名には、その密やかな感触とともに、「黄泉」にも繋がる冥界的な死のイメージがつきまとうのであり、私のゼーロンのこの再会の場面にも、やはりそのような暗さが影を落としている。

この第四章で私は、ゼーロンという対象をめぐる記号を採集し尽くした果てに、その記号の分厚い堆積層を飛び越えて、初めて「ゼーロン」という名前を口にする「最初の決心」をする。

「ペガサスービッコ馬ー土龍馬ーペガサスー愛馬」と、様々な記号性の間を浮遊するゼーロンの身体は、ここで初めて「ゼーロン」という名前、そしてそれを呼ぶ私の「声」と交錯するのである。

だが、私はそこで同時に「自分のわざとらしい音声」(私の声はここでは「音声」として知覚されている)に対し「冷汗を覚えすには居られぬ」い。それは、様々な記号の内に断片化し、周囲からは「土龍」と一義的に名付けられてしまったゼーロンを、へ私ーゼーロンの一体的な関係性の場に再び奪還しようとする、その回復行為の決定的な事後性を自ら意識したためであるのだろう。そして、この「自分のわざとらしい音声」に孕まれた私の演技性は、あくまで私とゼーロンの二者間の関係性の内に浮上するものなのであり、それはCの関係性に基づく二章の演技性とは全く異なるものなのである。

4 「黒い塊り」としてのゼーロン

——「幻想」の可能性をめぐって

そして、そこで問題になるのは、その直後の記述に孕まれた要素である。

すると枯草の中から、黒い塊りが、やをらと起きあがって、人の声の方に首の方向を向けて来るのであつた。私はぞつとして豆畑のふちまで後退りして、じつと土龍の顔色を窺つた。

ここで私の「わざとらしい音声」に反応し「起きあがつてく」る「黒い塊り」に対し、私は「ぞつと」する。この微細な記述に孕まれた「恐怖」こそが、このテキストにおいてついに見出された「ゼーロン」の姿（その記号性を剥ぎ取られた姿）なのかも知れない。この「黒い塊り」は、それまでの記号性の連鎖には論理的に組み込み得ない、ある不気味な「もの」そのものであるだろう。それ故にこの瞬間は、「黒い塊り」としてのゼーロンが、「ゼーロン」という名前の記号性（それは既に様々な関係性の内に分厚くくろみ込まれている）を内側から食い破り、さらには私の自閉的幻想の薄弱な殻を破り、全く異質な〈対象〉として立ち現れてくる可能性を孕んだ、まさに実存的「恐怖」の始まりの場でもあつたと言えるだろう。そして、同時にそれは、このテキストの膠着化した〈私ーゼーロン〉の関係構造を組み換えてくれるような、いわば新たな可能性の萌芽でもあつた。そこでは、「あのゼーロン」の再生への志向の内に、逆に死（「あのゼーロン」への遡及不能性）が再び発見されてしまうと

いう事態が起きているのであり、「死と再生」のモチーフは、ここでアイロニカルなかたちで裏返されているのである。

だが、この「黒い塊り」はその直後、「全く私にとつては意外のことに」、私に「猫のやうに慣れて」来るのだ。

——ところが、全く私にとつては意外のことには奴の両眼は女のやうに柔和な光に溢れて、物優しげにまたたき、真実しさうに長い顔を上下にゆすりながら、片方の前脚で、もつと、私に側へ寄つて呉れと物言ふが如くにこつこつと飼葉桶の端を叩くのであつた。私は寧ろ薄気味悪い心地で、左の肩を先にして横歩きに近づいて行くと、奴は益々猫のやうに慣れて来て、終ひには私の肩の上に長々と伸し出した鼻面を載せかけて私の顔に並べると、恰も嚙々たる睦言を語らふ如く微かな吐息をついた。——私は、もう大丈夫と安心して、もう一度、

「ゼーロン！」

と呼んだ。私の胸は奇妙に甘く高鳴つた。

私の意識を越えた所から転換が訪れる、という二章後半に見られたパターンが、ここで再び反復される。ただ、二章後半でのそれは、「私とゼーロンの荒唐無稽な物語」の一部として、ファルスのな物語機能を果たすものであつた。しかし、ここでのゼーロンの「慣れ」は、まさにこのテキストのダイナミズムの中心であり、また私の意識にとつて執拗な、強迫の対象であつたゼーロンの存在の実質をめぐる、決定的な「事件」であつたのである。

その意味で、私は「黒い塊り」としてのゼーロンを捕捉する

こともできなかつたのだ。この「黒い塊り」が即座に元の「土龍」に戻り、さらには「猫のやう」な存在になつてしまふといふことは、まさしくこのゼーロンという存在の質自体に関わる問題であろう。一章で私の内部に一旦浮上した「眞の愛情」といふ觀念と同質の感觸が、ここでその「物優し」さや「眞実親しさう」なその素振りにおいて見出されている。このような蜜月的な場においては、当然対象の他者性は排除されてしまふがゆえに、そこに「幻想」の強靱な〈論理〉が生まれる余地はない。ここで発された二度目の「ゼーロン！」という呼び掛けは、一回目のそれとは全く異なつたもの、つまり、ゼーロンが自発的に私と一体化してくれることを既に予期、確信した上で発されたものであつた。その甘美な期待とともに、このテキストは閉じられてゆく。

極言すれば、ここで「仮構」されたゼーロンの自発性は、明らかに「後退」であると言へるだろう。確かにこの「夜見の巻」において、私のゼーロン幻想をめぐる転倒性は自ら暴き出されておき、そこにこのテキストの能動的な意義がある、という言ひ方もできるだろう。もしかするとそこに、「小説のことはもう一つの可能性」を見出すことも可能かも知れない。ただ、そのような自己の構造の対象化が、「未知の世界への投企」としての、新たな「幻想の〈論理〉」を生み出し得るかどうか、ということとは、また別の問題である。このテキストに前提化されていた、〈私ーゼーロン〉をめぐるA・B・Cの関係性の構造とは、見方を変えれば、ゼーロンという対象に接近するためにあえて設定された、方法としての「不自由さ」であつたとも言へるだ

ろう。そのようなテキストの前提としての構造を一旦解体し、記号性の殻を剥ぎ取られたゼーロンの身体と直面した瞬間に、この私の無力さは露呈してしまふ。そこで私の幻想は行き場を失つたままに、いわばスナップショットとして永遠に「保留」され続けるのである。

勲を立てた名馬と騎手の銅像だ——と私は唸り、じつと空の彼方を望んだ瞳と、ゼーロンの首を抱へた腕に底知れぬ陶酔を覚えながら武張つた姿勢を崩さなかつた。肩に掛けた弓張り提燈にえんまこほろぎが止まつて頻りと翅をこすつてゐた。私の採集は膜翅から直翅に移つてゐたので少なからず食指が動いたが、折角の姿勢と未曾有の恍惚状態を崩すのが惜しまれて尚も微動さへ浮べなかつた。ゼーロンの吐息と首の重量との觸感が私の肩先から頬へかけて、生温く動いて次第に私は切ない樂感を覚えはじめたが、一層全身に力を込めて、壮麗な大空をほのぼのと見守りつづけた。

「ゼーロン」(『改造』昭和六・十)では、背負つていた「マキノ氏像」を「鬼涙沼の底へ投げ込んでしまふより他に手段はないぞ」と私が思うところでテキストが終わるのだが、「夜見の巻」では、「勲を立てた名馬と騎手の銅像だ」と最後に私が思うところでテキストが閉じられる(勿論そこにずれと歪みは刻印されてはいるが)。ここで偶発的に成立した〈私ーゼーロン〉の一体感を、私はまたも外部の視線を擬似的に導入する(〈私ーゼーロン〉のその姿を「銅像」化する)ことによつて維持しようとするが、それが決して銅像のような永続的形態として存在し得な

いことは明らかであろう。ここでゼーロンの身体の感触と「切ない操感」の浮上は、この「勲を立てた名馬と騎手の銅像」という形態の暫定性を既に仄めかしている。そこにはこの「未曾有の恍惚状態」が破綻し、あの「私―ゼーロン」をめぐる果てしなき堂々巡りの自動運動が再び始まってゆく契機さえ孕まれているようにも思えるのだ。

しかし、このテキストが最終的に行き着く場所がこの「銅像」化の場合なのか、それとも、関係性の錯綜するあの自意識の場合なのか、ここで簡単に断定してしまうことはできない。勿論「折角の姿勢と未曾有の恍惚状態」という言い方自体にアイロニーを見出すことはできるだろうが、いささか作り物めいた「壮麗な大空」に私のまなざしが向けられたまま、明るさをそこはかとなく漂わせつつテキストは閉じられる。それはあくまでゼーロンという対象をめぐる態度決定の「保留」であり、そこへの「問い」の停止でもあった。よって、「勲を立てた名馬」として再び記号性の領域の内に引き戻されてしまったこのゼーロンの内に、私の幻想を再びその内部から賦活し、そこに逸脱的な能动性をもたらすようなダイナミズムを見出すことはもはや難しいのかもしれない。

ただ、そこで自らの自閉的な幻想のシステムを見極め続けながら、「ゼーロン」という対象をめぐる変則的な事態（いわば、自己の幻想性がその対象の内部から相対化され、流動化してゆくような事態）に怯えながら立ち合っていたその私の在り方を、単に非徹底なものとして糾弾することはできないだろう。問題なのは、その私の怯えた「眼」が、その「後退戦」の内に

どのような問題領域を捉え得ていたのか、という、その視線の深度、強度なのである。「夜見の巻」において、様々な記号性の内に明滅し、恣意的に意味化され続けていたゼーロンという対象が、不意に「黒い塊り」として見出された瞬間、その怯えた「眼」を抱えた私は、「幻想」という表現形態をめぐる根源的な問題領域の内に、確かに足を踏み入れていたと言えるだろう。

坂口安吾が牧野信一という表現者の内に見出していた「鬼の目」（坂口安吾「オモチャ箱」『光』昭和二十二年七月）の内実も、そのようなコンテキストにおいて捉え直されねばならないものであると思われる。その意味でこのテキストは、牧野テキストにおける幻想の構造をめぐる新たな読み替えを、その私の怯えの内に喚起しているのである。

注

- (1) 野口武彦「足柄山のロシナンテ―牧野信一『ゼーロン』」(『文化記号としての文体』一九八七・九 ぺりかん社)
- (2) 注1と同じ
- (3) 佐藤泰正「牧野信一の文体の問題 ―ゼーロンものをめぐって―」(『国文学』一九七四・六)
- (4) 守安敏久「悲しき道化」(『日本近代文学』一九九一・五)
- (5) 宇野浩二の「夢の通ひ路」(『中央公論』昭和十二・二)には、牧野が「小説といふものは、小説は、宇宙へ出す手紙だぞオ」と叫んでいたという記述があり、牧野が自らの文字を、いわば宇宙的同一感を志向する拡張的営為としても捉えていたことが窺える。その意味でこの「夜見の酒倉の二階」という場は、牧野テキストにおいて何らかの象徴性を帯びた場であるのかもしれない。
- (6) 佐藤秀明「小説のことが立ち上がるとき ―足柄山の『ゼーロ

ン」(『日本近代文学』一九九五・五)

(7) 坂崎乙郎「幻想芸術の世界」1 幻視する魂の系譜(一九六九・

五 講談社現代新書)

○牧野テクストの引用は、全て『牧野信一全集』第一卷(一九六二・三
人文書院)に拠った。

(そえだ けんじ)